

日英語の比較をめぐって

（その4：日本語助詞論の3）

宇 納 進 一

Abstract : What follows is the fourth part of our attempt to describe some Japanese grammatical items and their English equivalents. More specifically, it continues the discussion on two Japanese particles, “ha” and “ga”, and explores the possibility of the semantic descriptions of them. It attempts to reexamine the notions like “topic” and “subject.” A proposal will be made that some conventional characterizations of the particles in concern should be rejected.

2.2.2. このように、我々の目にするハの働きは、ハの機能が「さておき」であるということによって統一的に扱うことが出来るという可能性を以下に更に論じていく。それに対して、主題のハ、対比のハのごとく、あたかも日本語の中に二種類のハがあるかのように言うことは、日本語の記述においてメリットが無いものかどうか検討しておくべきではある。例えば、野田（1995）は、とりたて助詞（ハ、モ、デモ、サエ、マデ、ダケ、バカリ、シカ、... ガ）を文の階層構造との関係で分類することでそのシステムの統一的な記述をめざすものであるが、そこに次のような記述が見られる。すなわち、例えば（上段が野田の例文、下段に本稿のより解かりやすい例文を補う）、

* 飛行機は欠航になったため、帰ってこれなくなった

* 太郎は来たため、パーティーが台無しになった [ハは微弱ストレス]

のように、主題のハはテンスの階層（詳しくは野田参照）の従属節である～タメという従属節には入れない、と言う。しかし、対比のハであれば、

飛行機は欠航になったため、汽車で帰ってきた

太郎は来たため、花子は来られなくなった

の如く、可。一方、

飛行機は欠航になったけど、新幹線を乗り継いで帰ってきた

太郎はきたけど、私は会わなかった。

に見られるケド従属節（野田によれば、ムード階層に属する節）では主題のハが現れる。

類似の指摘（というより野田の論考のもととなった議論）は南（1974：pp.123-4, 170）にあって、南の提唱する四類の従属句のうちB類（～ノデ、～タラ、～ノニ、～ナガラ等）には対比のハしか現れず、

体は小兵ながら、はやい球を投げます

提題（主題）のハはC類（～ガ、～カラ、～ケレド）の段階でようやく現れる。

太郎は来たけれど、すぐに帰った

もし、野田や南の言うことが正しければ（事実としてはおそらく正しいであろう）、主題のハと対比（とりたて）のハは分布の違う助詞であり、別物とあつかうことが必要であるようにも見える。

しかし、それは、見える、だけであって、これらの分布は何か他の因子・要因の結果にすぎない、という捉え方も可能である。すなわち、事実は、従節の種類によってさておきの度合いに制限が加わるのであり、そこにあるハはあくまで同じハである、と見ることは依然として可能であろう。従節の種類とそこで許されるさておきの度合い（0～1）について野田の例文も一部参考にしながらかしうく見てみよう。まず、

ラジオを聞きながら仕事をした

のごときナガラ節は一切のさておきを許さない。そもそもこの節は主語すら許さない、と南（1974：p.118）が指摘しているものである。

* 太郎がラジオを聞きながら、花子は仕事をした

すなわちこの節は、

花子のはのんびりと仕事をした

におけるノンビリトの如き様態副詞的な表現であり、その内部で何らかの具体的出来事を描写するのではなくて、なにか一般的、抽象的な記述をするものと考えられる。さておきとは、ある具体的な事態・出来事の描写においてその参与者・参与物とそれ以外のものとの関係を云々するものであり、従って、このような従節においては出番が無い。ゆえに、

ラジオは聞きながら仕事をした

は不可である。（この文は一見可能のように見えなくも無いが、この種の文が可能であるとするれば、その時ラジオはこの文全体の主題であり、文の最上層部に位置して従節内にはない。

私はまじめに仕事をしていました。そりゃま、ラジオは、確かに、私は（それを）聞

きながら仕事をしています。それはむしろ作業効率を上げてくれるのです

これは後に見る総主構文（本稿③部を参照）であり、ラジオはナガラ節の外にある。このような構造を感知しながら解釈されるならば、先の文も文法的である。）一方、同じナガラ節でも意味・用法が異なれば階層を異にし、さておきは可能である。

検察としては、小山は起訴しておきながら、村上を免訴にするわけにはいかない

このナガラは上のような様態副詞的なものでなく、二つの節（ひいてはそこで描かれている具体的な事実／事態）を対比させる逆接のナガラである。従って、ナガラ節自体がある具体的な出来事の描写であり、その中では当然さておきが可能であるとともに、節の性格（出来事の対比：逆接）から、強いさておきの登場だけがライセンスされている。一方、

昨日太郎が来たときに、花子は彼に会っている

のトキ二節はある事態の描写ではあっても、太郎についての言明を目的とするものではなく、全体として主文の修飾をするためのものである。太郎についての言明をするのではないから、太郎以外はさておくかどうか、というような問題自体が起こらない。ゆえにあらゆる強度のさておきがここでは不可である。次に、

太郎は来たけど、私は会わなかった（主題的：ハにストレス無し）

太郎は来たけど、花子はこなかった（対比的：ハにストレス有り）

のようなケド節においては、（ここでは幾らか端折った議論をしなければならないが）二つの節は内容的に等位節（A but B）的であり、ほぼ、単独節に準じたさておきとその強弱が可能になる。ために、あらゆる強度のさておきが可能である。

このように、節の性格が可能なさておきの範囲を制限しているのだとすれば、伝統的に言われる主題のハと対比のハの分布の違いというのはまたしても結果的にそうなる、という捉え方

ができることになりそうであり、統一的なハの規定という本稿の主張には矛盾しないであろう。

ハの規定について、このあたりで、最初のほうに引いた尾上の論の再検討もしておこう。尾上によれば、ハはすべからく句と句を対比させるものであった。そして、それは、確かに

春は来たけれど、暖かくなならない

のように両句の間に対応させる要素が無い場合は、そう考えるしかない。しかし、

太郎は来たが、次郎は来なかった

においても、あえて、句と句の対比と見なければならないものか。尾上の全体的立論にとっては、ハの係り結び性が重要な意味を持っており、この点で、尾上としては句の対比という考えは譲れぬ一線ではあるかもしれない。しかし、尾上自身が認めるように、現代語においては、係りと結びの形態的な呼応がくずれている。形態的にくずれた係り結び性がその文中での働きにおいては昔のままである、と主張することはそれなりの根拠がなければならない。かつ、この論証は、その正鵠を期するならば、今昔のハの具体的使用例の全般的な比較検討が必須である。これをする備えを本稿は持たない。しかし、この点で必ずしも尾上自身はそれをしている、と判断すべきものもまた無いように思われる。ここでは外堀を埋めるような、あるいは状況証拠的な論を提示することで、読者の判断を仰ぐがよいのか、とも思う。まず、上の春文である。

春が来はしたが、暖かくなならない

のように言い換えれば、この文はハの位置と句間の対比という意味内容が並行する。春が来ルことと、暖カクナラナイこととが意味的にも形態（ハの位置）的にも対比という関係で相即する。しかし、

春が来たが、暖かくなならない

という文中にも我々は対比を感知する。どこにもハは無い。同様に、

暇があっても、手紙ひとつ寄こさない

暇があっても、手紙ひとつ寄こさない

ハの有無に関らず、始めから、文意に対比があり、この時ハの果たしていることは、対比ではなくて、対比された句の中の中心的要素（暇）を強調することではないのか。あるいは、本来、句自体が持っている対比的意味がその中心的要素に転嫁されている、とも解釈できるのではないか。

太郎は弟を殺したが、罪に問われなかった

という文ではハは特に対比の仕事は担っていない。これは、“太郎”と“罪に問われなかったこと”との間には対比を誘うような本有的な意味の対立がないからである。しかし、“春”と“暖かくないこと”を並べてみれば、我々は自ずと相反するものを感じるであろう。最終的には句と句の対比であっても、春にはその対比を単独で担う潜在的可能性を持っているのである。“暇”と“手紙一つ寄こさない”ことの間にも類似の関係があろう。もともと、ハという助詞とは無関係にあった対比がこのような場合、句中の（後続句と対比の関係を単独で担い得る）中心的要素へとローカライズされた、と見ることによって、春文のハは説明できるのではないか。これらの例において確かに対比は句と句の関係かもしれない。しかし、それは、ハの対比がすべて句全体の対比とみなすべきものであるという証拠にはならないのではないか。

主題性のハに対して対比性のハが登場するのは、第一義的な結合点以外に置いてである、という主張も、また、ハの係り結び性に問題の全ての鍵を見出そうとする思いの一環であるが、

これに対しては、かなり明確な難点の指摘ができるだろう。

我輩は猫である

においては、常態的な二分点（主部と述部という切れ目）に現れているので、ハは対比性を持たぬ、と言う。しかし、同じ文がハにストレスを与えれば対比になる、という事実に対して、尾上は何の言及もしない。

我輩は（ストレス）猫である。しかし、お前は違う

同じ場所でストレス次第で、主題的にも対比的にもなる以上、ハという助詞はもともとそういうものである、と述べておけばよいのであって、係り結び性を盾にとり、非常態的結合点などというものを持ち出すことは無意味ではないだろうか。そして、尾上の言う非常態的結合点にある助詞ハは基本的に皆ストレスを持っている、ものと思われる。尾上自身の例で見ると、

タバコを、大山さんは吸わない

という文で大山さんは（文脈上の誰かと）対比されているのだ、と主張されているが、本稿筆者としては、特に対比を感じない。勿論、大山サンが対比された使用も可であるが、その時はやはりストレスがあるはずである。

教科書は読んだ

も、対比の例として挙げられている。しかし、

君、ちゃんと教科書は読んだのかね

という文において、教科書にはいわゆる主題性しか感じられない。少なくとも、これといった対比の対象無き文脈で十分登場し得るであろう。

教科書は読みましたが、虎の巻は読んでないので、この問題解けません

となって、始めて、対比である。尾上を批判しているこの機会に新しい指摘もしておけば、この場合でも、教科書は主題性が強く、虎の巻が（ストレスを伴って）対比性を示しているのである。二つ並んだハは通常は一方だけが対比のハである。

太郎は賢いが、次郎は賢くない。

これは句の主従関係からして次郎についての陳述であるはずであるから、次郎は主題性を持つに過ぎない。次郎との比較で、「太郎なら賢いと言えるのだが」という意味で太郎だけが対比性を持っている。但し、意図的にストレスをコントロールすれば、これをあえて逆転させることも可能ではある。等位的な関係になれば、

太郎は賢い。しかし、次郎は賢くない。

まったくストレス次第でどちらを対比的にすることもできる。しかし、重要なことは、談話の中心が太郎にあるならば、太郎は主題性を帯び、従って弱いストレスのハが添えられ、太郎との関係で参考までに（つまり、つけたし的な話として）次郎が対比性（強いストレスのハ）を持って登場する、一方、次郎が話の中心であれば、この逆となる。

ここで論じられていること自体が微妙で言葉では説明しづらく、さらにストレスの有無というのもまた微妙で心理的／主観的なものがからみやすい。多くの読者（日本語話者）の評価に俟つしかない。しかし、重要なことは、同じひとつの例文を眺めつつ、とりようで主題性にも対比性にも大きく揺れ動き得る、ということを感じては頂けるのではないか。そして、このこと自体が尾上の結合点説を論駁している、と思う。対比性と主題性は同じものの強度の差であることが本稿の説の中心である。理論の当否、および最も純粋な主題的ハはさておいて、対比性が程度の問題であることは、そもそも、議論の対象とする必要もないほど自明の事実だと思

う。この“程度の問題”という性格を取り込めない理論はここですでに破綻している。尾上説は大変興味深い、ある面では洞察にみちたものではあるが、対比性の原郷をハの登場位置に求めてしまうことで、程度の問題を取り込みにくくしてしまっていると思われる。一方、この説でなるほどと思える部分については、つまり、ハの使われる位置がハの主題性／対比性を左右するという部分については本稿ですでにその仕組みを上¹に提示している。すなわち、主題（本稿に言う主題）位置においてのみ、対比性無きハが登場する。それ以外の場所ではハは対比の意図無く使われることは無い。この考えは尾上の結合点理論と外延的にはほぼ重なることに注意されたい。

ハの規定や分布については、順次この後にも追論していくことにして、ガとの関係の問題に戻ろう。上のようにハの機能を規定することによって、ガとの関係解明にも近づいていくことを以下に示すが、その前にガにはガの論じなければならない問題が前途に山積していることに対処しなければならない。まずは、この問題との関連で久野の「二つのガ」説をみてみよう。久野は、

太郎が賢い

空が青い

の二文において、前者は、太郎以外の人間（もちろん談話のドメイン内の人間）は賢くない、という含意を持つ EXHAUSTIVE LISTING（網羅的列挙：総記とも訳されている：以下、時に網羅と略す）のガであり、後者はそのような含意を持たない NEUTRAL DESCRIPTION（中立的記述）のガであるという。同じ形容詞という（状態・性質の記述をする）述語を従えていても、その状態に一時性がある時、ガ主語を持つ文は中立的記述であり、その状態が変化しない恒常性のある時、網羅的列挙となる、のだと言う。主題と対比という二つのハに続いて、今度は、二つのガである。ある時は網羅、またある時は中立。何かもっと統合された形のガの記述はありえないだろうか。

まず、ガという助詞そのものが網羅的列挙をする力を持っているのではない、ということは自明であろう。

太郎が賢いことは誰もが知っている

のように従属節としての「太郎が賢い」は網羅的列挙をしない。独立した文として使われた場合にのみ、網羅的列挙をするということは、網羅的列挙がガに内在する性質ではないと解釈すべきであろう。同じ語列が独立文として使われる場合と従属節として現れる場合で何が違うのかといえば、これは言うまでも無い。通常、独立文にあっては、問題の語列は話者の主張を構成する。従属節内では（必ずしも）そうでない。独立文では太郎が賢いということが話者によって主張される（、あるいは、話者がその真理性に責任を負う〔勿論グライスのマキシムの統治下においてである〕）。そして、ここが本稿の主張であるが、

太郎が賢い

というガ文が（従説以外では）網羅的になるのはハを使わなかったというその事実から来ると考えてみたい。誰が賢いかという問題に関して、話者は太郎にそれが当てはまると主張する。ここで本稿の採るガの規定を思い起こされたい。ガとは陳述のあてはまり対象を提示する助詞である。賢イという陳述は太郎に当てはまる、と上の文は言っている。（ただし、これは、決して太郎以外には当てはまらないとは言っていないことに注意しよう。

1+1 が 2

というのは、論理的には、

$2+0$ も 2

ということ、排除するものではない。)しかし、ここがポイントなのだが、太郎には「他はさておき」のハが使われていない。網羅的列挙の拠って来たる源をここに求めてみたい。助詞ガで導かれたということは、「さておき」という操作、すなわち、助詞ハによる太郎の囲い込みがおこなわれていないということなのだ。すると、論理演繹的には話者は太郎以外の人の賢さを否定しているようにも見えてくる。勿論、ここで論理演繹的というのは本当の(つまり本来の命題論理学において認められるような)演繹ではない。

$\exists (X)[\text{賢い}(X) \wedge \text{太郎}(X)]$

という命題が

$\forall (X)[\sim(\text{賢い}(X)) \wedge \sim(\text{太郎}(X))]$

という命題を含意するような論理系は存在しない。実態は、「あの人は『太郎が賢い』という主張を(他をさておくこともせず)した。ゆえにあの人は『太郎以外は賢くない』と思っているに違いない」というようなむしろ聞き手側の想像的推論(この推論という言葉も論理学のそれでないことに注意!)のごときものに過ぎない。しかし、多くの自然言語内推論はこの類いであることも夙に知られている。論理学の教科書における“ \vee ”(OR)や“(IFF)”[IF AND ONLY IF]に対するものとしての“IF”の説明を思い起こされたい。老婆心ながら、論説すれば、

テストで100点を取れたらファミコンを買ってやろう

と言明し、60点しか取れなかった息子にファミコンを買ってやった父は嘘つきのように見える。しかし、形式論理的には最初の約束は

取れなかったら買ってやらない

を含意していない。また、上の状況で、

ファミコンかPHSを買ってやろう

と約束し100点を取った息子に両方を買ってやった父はやはり約束とずれた行動をしているように見えるが、ここでも、形式論理的には

$\text{BUY_FAMICON} \vee \text{BUY_PHS} \equiv \sim(\text{BUY_FAMICON} \wedge \text{BUY_PHS})$

などということはないのである。しかし、日常生活的には、これがまるでド＝モルガンの法則であるかのように我々は思考している。そして、両方を買ってやってしまった父を半分嘘つきのように思う。かくて、我々が今ここで目にしているものは、これを理論的に追求しようとするならば、古くは生成意味論の一派が唱えた NATURAL LOGIC の議論(Gordon and Lakoff (1971)の Conversational Postulates 論あたりを嚆矢とする)、近年にあってはグライスの IMPLICATURE 論などの議論になるはずであるが(実際、上段のごとき論理演繹はグライス理論の中に組み込んでも良い内容のものかもしれない)、今はそのような議論に立ち入る必要はない。上に言う「論理演繹」はあり得るものだ、ということを示せば足るであろう。かくて、ガ文の持つ網羅性は「他はさておき」という但し書きが付かなかった、という事実に由来する、という仮説は一応論理的にあり得る仮説ということになった。

上の段と同趣旨を確認の為に述べておこう。例えば、

太郎は賢い(弱いストレス＝弱いさておき)

と人が言うとき、ここでのハは、太郎の囲い込み＝太郎以外の者のさておき、すなわち、「私

は太郎の賢さを主張するが、太郎以外のものについてはその賢愚を意見表明するものではありません」という宣言としてある。それゆえ、

太郎が賢い

では、このハが使われなかったことにより、結果的に（と言うより、未必の故意的に）太郎以外の賢さを否定してしまうのである。ハという助詞を持ったがために、日本語ではそうなるのである（傍点部は、「英文法では網羅的列挙なんて話題にもならない」の意である）。さて、話者の主張の領域外である従属節においては、上のような演繹プロセスが起こらない。結果、従属節内では網羅的列挙は起こらない。

太郎が賢いことは皆知っています

ここでは、ハが使われなくても、従属節と言う囲い込みによって、すなわち、話者の主張ではなくて単純な命題内容であるという事実によって、太郎以外のものに述語賢イの述定力が及ばずに済んでいる。（あるいは、コトという準体詞はその節の内容を「前提化」してしまう、という言い方も出来よう。

太郎が賢いことを私は信じない

太郎が賢いと私は思っていない

上文は論理的整合性を欠く文である。コト説の内容は主張ではなくて前提 PRE-SUPPOSITION であるからである。そして、まさに前提は主張ではないゆえに、その中では問題の論理演繹が起こらない。）

但し、同じ従属節内でも、実際には、

次郎は太郎が賢いと言っていますよ

の如く、網羅的列挙は起こり得る。実際にはこの文は網羅と列挙の間で曖昧である。勿論、VAGUE ではなくて AMBIGUOUS の意で曖昧なのであり、この文は

「太郎が賢い」と次郎は言った

「太郎は賢い」と次郎は言った

のいずれのケースをも報告し得る文である。「～と次郎が言った」という要素の存在が従属節内の曖昧性を生じている。かくて、網羅的列挙性は、「言う」という言語行為 SPEECH ACT に内発するナニモノカであるとも言える。これは、「真実だと思ふことだけを言え」というグライスのマキシムは「命令」とか「疑問」のような SPEECH ACT にはあてはまらない、といった事実の当然の結果である、という言い方も可能であろう。更に言えば、網羅的列挙という現象はハという助詞の不在とこのマキシムが連携して産み出している、と言ってもよいかもしれない。

この点で重要と思われることを、わき道にそれるようであるが、注意しておかなければならない。

A：答案は何で書くのですか

B：はい、鉛筆で書きます

の B の発言における鉛筆デも、言ってみれば網羅的列挙をしている。B の文は鉛筆以外（ペンやボールペン）を排除・否定しているのである。鉛筆デと発話したからには、上の論理演繹に従って、他ノモノデを否定するに等しいと解釈される（「あの人は、鉛筆で、と言った。ゆえに、他のものではダメなのだ」）。すなわち、ガ以外の助詞に導かれる要素はすべて網羅的列挙されているのである。これを裏返せば、中立的記述の存在は「ガが導く要素についてのみ、

網羅的列挙を起こさないことがある」ということになる。このことが現下の問題の実相である。つまり、ガによる網羅的記述と中立的記述の区別という問題にとっては、「あるガが網羅的列挙を起こす」のではなくて、「あるガはそれを起こさない」ということが本当の問題なのである（この起こさないケースは勿論以下で論じる）。ここで更に注意しておくべきことは、何故にガのみが他の助詞と違って、このような事象を起こすのか、という問題である。そうさせる何かが日本語助詞システムには存在するということである。伝統的には同じ格助詞という範疇に入れられているものの内でひとりガのみがその使われる位置・脈絡でその相貌を変える。このことは是非注目しておくべきことである。以下でそのコララリーを見ることになるが、網羅現象の本稿における分析を完結させる前にこれに関してもう一点だけ確認しておくべきだ。

網羅的列挙もハの「さておき性」と同様に揺れ動く性質を持っていると思われる。次のようなやりとりに日本語としての不自然さは無いと思われる。

A：わが社では誰が賢いの？

B：はい、宮地が賢いです。ま、他にもいるかもしれませんが。

あるいは、

A：答案は何で書くのですか

B：鉛筆で書きます。事情があればボールペンも許されるかもしれませんが。

ハの場合の揺れ動きほどには明確な事象ではないのだが、少なくとも、網羅的列挙が二値論理的な性格のものではなく、ファジー関数（つまり要素の所属度がパーセンテージで表現される集合論に基づく関数）的な性格を持っているとは言えるだろう（すなわち、強度1（最強）をもって宮地以外、鉛筆以外を否定してはいない）。賢いのは宮地だけなのだ、という思いが強ければ、（少なくとも心理的な）ストレスがガに付くと思われる。この点でもストレスとの相関で強弱を示すハのケースと並行する。基本的にファジーなのである。ファジー関数やファジー論理はもともと自然言語のもつフレキシビリティ（エアコンやヒータにあっては「あと2度温度を上げて…」ではなくて「もう少し暖かく…」の如き）を数学・形式論理ひいては科学技術の世界に導入するために考案されたものであるが、自然言語そのものは二値論理的な部分とファジー的な部分を併せ持ったものである。歩クが動詞であることにファジネスは無く、デが道具格であることは二値論理的な事象である。一方、網羅的列挙性はファジーな部分である。そして、このことから見えてくる重要な事実、久野の網羅的列挙と中立的記述の区別は結局のところ「地続き」の事象であり、ハにおける主題／対比という二面性と相似の構造を持っているのではないか、ということである。少し結論先取りの議論になるが、ここで、これを簡単に論じておこう。ガという助詞の本務は「その文によってなされている言明が当てはまる対象を示す」というようなものである〔主格を表わす、というのは第二義的な機能である〕、ということを既に述べた。そこで、ハにつくストレスが「さておき度」の強弱をコントロールする、という言い方に倣えば、ガにつくストレスは「当てはまり度」の強弱をコントロールすることになる。この点をもう少し見よう。

まず、当てはまりという点で確認しておけば、上でも挙げた例文、

A：この本を御覧なさい。この本は 筒井のサイン入り初版本です

B1：へえ、この本がそうですか。

と、

B2：へえ、この本はそんな大層なものなんですか

を比較されたい。B1においては筒井の初版本であることがコノ本にあてはまるから、ガが使われているのである。一方、B2においては、やはりソナナ大層ナモノはコノ本にあてはまるのではあるが（したがって、ハの裏にガが隠れているのであるが）、この陳述部は新しい内容のもの（新情報）であり、したがって、それがあてはまる対象を云々する際に、その当てはまり対象（コノ本）の他をさておいたのである。つまり、B1においては、主題も陳述も旧情報であるために、無条件で両者を等号で結ぶ、つまり、あてはまり関係だけを明言すればよいが、B2では新情報である陳述を無闇にどんなものにもあてはまるのをさけるためにさておきの助詞で主題を囲ったのである。

さて、そこで、「当てはまり度」の強弱である。杉本(1995：p.102)は、次の文、

太郎が来た

も、ガにストレスがあれば、総記（本稿に言う網羅的列挙）の解釈になる、と言う。この文を考える前に、つぎのような表現をまず考える。

A1：おれは天才で、お前は馬鹿だ

B1：何を言うのだ、僕が（ストレス無し）天才で、あんたが馬鹿だ

A2：いいや、おれが（ストレス）天才で、お前が馬鹿だ

このやりとりのA1ではハが使われ、B1ではガが使われる由縁は上に見た。B1では、二つの旧情報をつなぐ、つまり当てはまるのだ、ということのみを言えばよいのから、ガでよいのである（陳述部が新情報である場合にはその当てはまり対象に留保をつけることが幾らかなりとも必要になる。これがA1における弱いさておきのハである）。では、A2でガにつくストレスはどんな働きをしているのだろうか。

におけるガのストレスの強弱も当てはまり度の強弱ととらえることができる。この文は状態述語ではないから、必ずしも、ガが網羅的列挙をさそわないが、ストレスが置かれると、来タという述定があてはまるのは太郎であると強く言うことになり、結果的に他を否定するの響きを帯び、一見、網羅的列挙のような性格を示すことになる、と杉本は言う。われわれのガの把握はこういった事象も自動的結果としてとりこむ。（詳細は後述。）

その久野の言う網羅的列挙と中立的記述の区別に話を戻すことで論を先に進める。網羅的列挙の因って来たところの仮説は提示したが、中立の起こる由縁は未論である。ガの現れるところ全てで網羅が起るのではない。本稿で述べたような演繹プロセスが起らない場合とはどのような場合なのか。再確認すると、久野によれば、状態述語の意味内容が「変化しうる状態」を表す時、ガは中立的記述である。

空が青い

に網羅的列挙性がないのはこのためだとする。空は青かったり（夕焼けで）赤かったりするからである。何故、このような時には網羅が起こらないのであろうか。また、我々の網羅現象への説明はこれらに対してどのように機能するのであろうか。これに答えるべく、まずは一時的状態性というものを考えよう。

今日は小田は元気だ

人は元気な時もあるとそうでない時もある、と言う意味で元気というものも一時的状態と言える筈だ。が、

今日は小田が元気だ

は概ね網羅的列挙であろう。何故、ここで網羅が起こるのか。「一時性」が足りない、という

のではあるまい。

今日は町が静かだねえ

という文はほぼ中立的記述であるが、小田の元気さの時間的サイクルと町の静けさのそれとの間にとりたてて大小は無いと思われる。結局、「状態」であり「一時的」であるという点において空の青さも小田の元気さも町の静けさも変わりはないであろう。この時点ですでに久野の説明はくずれかけている。更に、

A：今日は誰が元気かな

B：小田が元気ですよ

は網羅的記述であり、一方、小田の立ち居振舞いを視認しつつ、人が

ほら、ご覧、小田がとっても元気だよ

と言えば、中立的記述であろう（すなわち、小田以外の元気さを否定はしない）。つまり、どちらも有り得るのである。これで久野の論は崩れる。では、どのような条件下で網羅的列挙が起らないのだろうか。

角田(1992: pp.)は、ガの網羅と中立記述の切り替わりにはシルバースティンの「名詞句階層」が関わっていると看做する。シルバースティンの「名詞句階層」とは

1 人称代名詞→二人称→三人称→親族名称→固有名→

人間名詞→動物名詞→非生物名詞

という名詞句の序列であり（ここでは簡略化して引用した）、このスケール上で各種の文法的事象がグラデーション的に生起するというものである。例えば、能格・絶対格構文と主格・対格構文が混在する言語において、高い序列の名詞句ほど前者の構文に現れる（、また、従って低い序列のものほど後者の構文に現れる）、といった具合である。そして、角田によれば

私が勉強しています（階層序列最高位：網羅）

太郎が来ました（階層序列中位：網羅か中立かは文脈次第）

雨が降っています（階層序列最低位：中立）

の如く、名詞句階層が高いほど網羅的であり、低いほど中立だという。しかしながら、同じ固有名でも

太郎が賢い

は序列中位ながら高度に網羅的であること、更には、

ボルシェが低燃費だ

は序列最低位にして高網羅的、

僕が手伝ってあげる

は序列最高位にして中立的であることなどからして、この論は成り立たない。よしんば、成り立ったところで、説明原理にはなりえないであろう。名詞句階層の序列と網羅性の程度との相関が具体的には日本文法の中で一体どのようなメカニズムとしてどのような形で組み込まれているのかがまったく論じられておらず、このままでは、日本語文法を記述したことにはならないだろうからである。

本稿での説明の試みとしては、まず、冒頭に引いた内田賢徳の論を呼び戻すことになる。内田の論考は基本的な部分でやはり重要なことを衝いていると思われる。内田の論を現下の区別にあてはめれば、「現前性・眼前性（内田の「臨場性」）」を持った表現においては独立文のガと雖も網羅的列挙（勿論、久野のような範疇としてのそれではなく論理演繹の結果としてのそれ）

を誘わない」といった説明が浮かぶ。すなわち、臨場的発話においては、話者たちの意識は眼前の光景、そしてその登場（人）物に局定され、余のものには及ばない。このことが件の論理演繹をブロックする。

空が青い

という文は

あ、生徒が花に水をやった

という文と同じように「眼前の光景、目の捉えた現実」を表現し、その文の意味が「知覚の統合の結果としてある」ものであって、「真でしかありえない文」なのである（引用符内はすべて内田）。このような発話において、「空が青い、と発話したからには、空以外は青くない、と言ったに等しい」などという（上に述べた網羅を惹起するあの）推論プロセスは働かない。これに対して、

太郎が賢い

というのはそのような知覚の直接的表出ではなくてある悟性的判断である。そこには、太郎と太郎以外の人物との比較もあり得るであろうし、A ならば B（含意）、A、B、故に C（三段論法）、の如き各種の論理的推論の展開し得る場があるのである。述語の一時的状態性というのは、多くの場合、知覚表現と判断表現の違いに付随するものに過ぎない。従って、一時的状態性は網羅と中立の明瞭な決定因子ではない場合も出てくる。

わあ、バラが綺麗だね

の知覚表現には網羅的列举性は無く、一方、花の中では何が綺麗だろう、というような問答においては、

バラが綺麗です

というのは悟性判断であり、また、ゆえに、網羅的列举であろう。しかし、ここにおいて、述語の一時的状態性というようなものがそもそもあまり明確なものではない。バラというものは、美しかったり、醜かったりというふうに、その状態を変化させるものかどうか、ということ自体、我々はあまり明確に答えることが出来ないであろう（枯れれば醜くなるだろうが）。かくて、状態の一時性とは関り無く、

ほら、ご覧、小田が元気だ

は、目の前の光景であるから、小田に対してハによる囲い込みを行わなくとも、言明の対象は小田のみなのであり、一方、（内田＝森重の）「観念性判断」においては、まさに観念的判断ゆえの様々な論理演繹も伴うがために、（通常は）網羅的列举を誘導する上のような論理演繹が起こってしまうのである。ここで、眼前性すら絶対条件でないことにも注意しよう。たとえ、目の前にいる人物達を評して発話される場合でも、

ああやって、みんなおとなしく座っているが、実は今日は小田がやたら元気だ

は（様々な論理演繹が発生する）悟性内営為であり、網羅を起こす。ハによる囲い込み無しで小田と言えば、網羅的列举をしたことになる。勿論、この文は視認したものの直接的表出でないことは解かりきったことだろうが、ポイントは眼前性にあるのではなく、内田の言うように、知覚の言語的統合であるか否かである。東京タワーを指差して、

あれが東京タワーです

と言ったとしても、これは知覚の統合ではない。ある事実（すなわち、あのモノの名称）を人に教えるべく発話された、悟性判断的言語形式である。眼前性は知覚の統合の必要条件ではあ

るから後者には必ず前者が付随する。しかし、十分条件ではないから、眼前性があれば知覚の統合、というわけではない。つまり、眼前性は非網羅の絶対条件ではない。

そして、最終的には、「知覚の言語的統合」すら、網羅を起こすか否かの本質的基準点ではないだろう。

空が青い

において、ひととき、網羅の可能性が低いのは、眼前描写性・知覚統合性が高いことに加えて、その文義からしてくだんの論理演繹が起こる余地が殆ど無いことによる。小田が賢いか否かが問題にされるとき、それでは余の者たち、例えば小田の同僚として野田や井上はどうなのだろう、といった疑問が常に幾許かは誘発される。程度の差はあれ、無意識下で小田以外の人物との比較検討が自ずと開始されてしまう（ハがブロックするのはまさにこのようなものなのだ：それは止めてください、というのが弱いさておきである）。しかるに、空が青いのならXはどうだろう、などという疑問を成立させるようなXは考えにくい（つまり、“対比すべきもの＝さておくべきもの”がない）。せいぜい、

空は青いが、海は（汚れて）青くなかった

のような光景だろうか。しかし、このような場面設定まで考えれば、そこでは空が青い（空が青イ）が網羅の列挙となり得ることは最早見易いことである。

A：海と空のどちらが青かったの？

B：空が青かったです

このように、一つ一つの事例を順次論じていても詮無いことである。結局のところ、XがYデアルと発話された時に、「では、X以外はYではないのか」という問題が惹起されるか否か。ハの不在が誘う論理演繹はこのようなものを前提としてのみ起こる。これが、網羅を起こすか否かの基準点・分水嶺である。そして、臨場的描写もまさに同じ原理で網羅を起こさないのである（すなわち、上に述べた「話者たちの眼前への意識の局定」ないし「非悟性判断的性格」が通常の論理演繹を排除するのである）。網羅現象を起こすガ文は述語が状態性を持つもの、典型的には形容詞類でなければならないことも、ここに由来する。一回性・一過性を特徴とする出来事文においては、「では、X以外はYではないのか」などと問うことは多くの場合空しい。

太郎が参加した

に対して、「では太郎以外は参加しなかったのか」と問うていてもキリがない。しかし、状態性とは非一回性、非一過性、非時間性である。そこでは、「では、X以外はYではないのか」という問いは、今この瞬間を越え出るものであるゆえに（つまり、ある時点で発生し、そして消えていく出来事ではないゆえに）、意味を持ち得る問いである。ただし、キリがあるかないかは程度の問題であり、出来事文においても、その問いは原理的には意味を持ち得る。太郎以外は参加しなかった、という意味を込めて、上の文を発話することは可能であり、また、そのことを明示すべく、人はガにストレスを付与するのである。

かくて、あるガ文において網羅の列挙が見られるか否かは、ガそのものではなくすべて外的要因の関数であることが結論付けられた。そうして、ハは、その名詞句を囲い込む（他を〔否定するのではなくて〕さておく：余のものについてはノーコメントと宣言する）ことによって、それら外的要因が惹起してくる網羅性を排除するのである。すなわち、久野の言う網羅と中立と言う現象もガとハの基本的機能が産み出す結果に過ぎない、ということが確認される。（付

記しておけば、久野においては、ガが網羅を表わす場合と中立を表わす場合がある、と述べているだけであり、この時、日本語に二つの別個の助詞ガが存在するとまでは言っていない。しかるに、野田（1995：p.18）では、網羅が伴うガを「排他のガ」としてこれを独立させ、様々なとりたて助詞の分類の中に位置付けている。この種の「二つのX」という概念が日本語研究においては多見されるが、このようなことはなるべく避ける方向に日本語の真実があると考えたい。日本語にはハシという語（橋と端）が二つあって、それらが同音異義であるというのは疑問の余地が無い、また、徹底的な分析の結果として別物と扱わざるを得ない、ということがあれば、これも問題は無い。しかし、研究途上のものに関しては、とりあえず、一つのものとして見ていくほうが方法論的には有効ではあるまいか〔即ち、オッカムの剃刀である〕。）